

立山 愛山 生

役と唱ふ、笠を頂き扇を持ちたるもの十四人、これを添役といふ、本役は東西相對して立ち、添役はその背後に沿ひて、一隊輪の如く立ち並ぶなり、奉行下知を傳へ、本役太鼓を打ち、聲をあげて謠ひ舞ふ云々』とあるがそれで、史籍集覽神明鏡には『……大旱魃以ての外也、農民徒らに孟夏三月を過ぎ四海の民愁る所を思召て弘法へ此由申し請雨の祈を仰出されければ勅に應じて空海……俄に神泉苑の池を掘り清涼の水を湛へて善女龍王を請じ給ふに應て龍王小身を現はし一尺許りなる小蛇と成つて此池に來り溫雲油然として大雨降り國土を潤ほす云々』とあり、また輟畝録には蒙古人の禱雨法を録して『惟取淨水一盆、浸石子數枚而已、其大者若雞卵、小者不等、然後默持密呪、將石子洶漉玩弄、如此良久輒有雨』とあるが孰れも類似の法則に依つてゐるものである。

一、概説

二、登山路

一、芦峰寺口

二、黒部口

三、早月口

四、大町口

三、登山準備

一、服裝

二、食料

三、携帶品

一、概説

和漢三才圖繪に因るに、立山は大寶年間越中の國司四條大納言有若卿の嫡男有頼の開基に係るものとせられ、富士、白山と共に日本三靈山の一に數へられてゐた程、宗教的には早く開けた山であります。現今のやうに登山の隆盛にならない以前でも信仰のために盛んに登られました。越中では男子十五歳になれば必ず參詣したものです。立山へ登らなければ一人前の男とされなかつた位です。出立に際しては村人は馬を美々しく飾つてそれに乘せて村端れまで送り、參詣者は歸りに參詣の證として

登山口の芦原寺で立山大権現の旗を求めて、之を村の氏神に獻じたものです、隣人は餅を搗いて祝ひます。越中では今でも其の風習が幾分残つてゐます。

普通立山といへば雄山、淨土山、別山を含めて云ひます、之を立山三山といひます、今では南は五色ヶ原から北は劍岳も加へるやうです、立山一帯は火山岩で、東面にカールがあるので有名であります、山貌の雄大と登山路が北アルプス中でも最も早く開けて居た關係から、そして最近に至つて交通が著しく便利になつたので登山者が年と共に増加する有様であります。立山は北に劍の峻嶮と南に五色ヶ原の百花絢爛たる大高原を控へて、その雄大壯麗な眺めは日本アルプス中他に求めることは出来ないのであります。

最近冬期スキー登山が行はれるやうになりましたが、我が國のやうな溪谷が多く、そして標高の割に急峻な山岳の多いためスキー登山も困難なものとされておりましたが、立山の彌陀ヶ原はその廣大なる面積と、その高度が有する良好なる雪質とを彌陀ヶ原をして天下の大山岳スキー場として喜ばれ、スキー家の活跳を見るやうになりました。特に劍岳の岩登りは穂高岳と共に登山家の憧れの中心となりました。

## 二 登山路

立山に登るには北陸線富山から入つた方が最も便利であります。富山駅で下車したならば直に驛前から堀川新行きの市内電車に乗り富山縣營鐵道の起點南富山驛に行つて千垣行きの汽車

に乗り換へます、汽車が富山平野を走る間、車窓からは立山の連嶺が屏風のやうに雲表に聳へるのを見ます、約一時間で終點千垣に達します、沿線、芦原寺村には立山前立社壇があり、横江驛は立山鐵道の終點立山驛に對してゐます。

千垣驛前には芦原寺村中語組合の出張所がありますから、そこで案内者を雇ふことが出来、立山では昔から剛力のことを中語と呼んでゐます、芦原寺の雄山神社大社を昔中宮寺といひましたからこの奉仕者であることを意味するやうです。

約半里で常願寺川最奥の村芦原寺に來ます、昔から立山登山の根據地として知られ立山雄山神社の攝社があります、境内は杉の大樹鬱葱として靈猶暗く、酷暑の候でも汗が一時に去るを覺えます。登山者は禮拜して山中の安全を祈ります、雄山神社社務所、中語組合があり旅舎もあつて登山者の便を圖ります。笠、杖、蓑、草鞋、食料品等の登山用品を調へることが出来ます。

常願寺川の右岸を廻ること一里半で藤橋に着きます、常願寺川と稱名川との合流點で稱名川には元藤蓑の吊橋が懸けてあつたのでこの名がありますが今は立派な橋が出来てゐます、茶屋があつて休憩宿泊することが出来ます。藤橋からは稱名川を廻つて行くこと約二里で有名な稱名滝に行きます。

藤橋を渡つて三四町行く道は二つに岐れて、右常願寺川に沿ふて行けば約三里で立山温泉に行き、左の急坂を登る道は立山登山の舊道であります。立山の室堂に行くには以上のやうに立山温泉を經るものと、舊道を行くものと、稱名川を廻るものと

この三路がありますが、その中で最も興味のあるのは矢張舊道であり、温泉道と分れて草生坂、黄金坂、材木坂を登り、これ等の坂は以前は非常に急峻でありましたが近年修理されて左程困難を覺えないやうになりました、材木坂は玄武岩の柱狀節理の模範的のものであります。これは昔女人堂建設のため木材をこゝまで運び上げたところが若狭國小濱の尼僧止宇呂といふものが来て誇いだので木材は悉く石に化したものだと傳へられてゐます、坂を登り切るると山毛櫛や杉の大樹が思ひの儘に茂つた一平地に出ます。立山杉はその木理の美しいので賞ばれます、遙か殘雪に輝く薬師岳が木の間から陰顯します、途中に美女杉、禿杉、鍋被杉、夫婦杉等の名木があります、禿杉はその昔立山の開祖有頼卿に仕へてゐた一少女が卿を慕ふて乳母とこゝまで來たが進めなくなつて杉に化したものだと傳へられてゐます。平地の盡くる處に、山毛櫛坂、無難坂の急坂があります、坂の上には丸太で作つて掘建式の茶屋があります。尙も山毛櫛林の間を進み、荆安坂を登つて暫く行くとい伏拜に出ます、遙か前面の溪谷を隔て、落下千三百尺の稱名瀧の飛瀑を見るこゝが出来ます。これから約一里の桑谷には一昨年(大正十一年)旅舎式設備のある茶屋が出来ました、更に後坂、前坂を過ぎて森林中の細徑を行くと一里許りの廣漠たる彌陀ヶ原が前面に展開します、その入口に弘法茶屋があります、昔弘法大師が此處まで來て水に窮し杖で地を突いたとき涌き出たものと傳へられてゐます。

弘法茶屋に向ひ合つて昨年(大正十二年)懸崖の小屋が建設さ

## 立山

れました、これは彌陀ヶ原をスキー場とするには完全な小屋を必要とするので外國アルペンの小屋の範をこつて作られたもので二階建の立派なものであります。水に不便なところから井戸までも掘つてあります、單に冬季の登山家のみならず夏期の登山家にとつても甚だ便利になりました。

蕨笹や、雜草の生茂つた彌陀ヶ原に行くこと約二十丁で丸太作り掘建式の道分茶屋があります、茶屋の手前で道は二つに岐れて、右は姥懷を経て鏡石に通じて室堂に達するもの、左は一ノ谷、二ノ谷の深谷を鐵鎖に縋つて越し、獅子ヶ鼻の險崖を攀ぢて尙も進むと鏡石附近で姥懷路と合するものであります、こゝには石疊みの避難小屋があります、蓮小屋といひます、附近にはイハカミ、チコグルマ、ツガザクラ、偃松等の高山植物を見ます、二三の丘陵を過ぎて室堂に着きます、蓮小屋からは地獄谷を廻つて、室堂へ行く道もあります。

藤橋から稱名川を廻り稱名瀧を経て急坂を攀ぢて獅子ヶ鼻附近で合する道が最近開かれましたが樂な道といふことは出来ません。

又一方藤橋附近から舊道に岐れて常願寺の右岸に沿ふて行く温泉道は、鬼ヶ城の險を経て、藤橋から約三里半で立山温泉に達します、温泉附近は毎年の山崩れで傷々しい許りに赤褐色の山膚が現れてゐます。

温泉から一里程下流に一水の南から來て常願寺の本流に注ぐのを見ます、日本アルプス唯一の山岳村、有峰に源を發する眞川であります、近年幾度かの出水で非常に荒れて眞川を入つて

有峰に行くことは困難になりました。

立山温泉は常願寺川の源流、湯川の左岸平地にあります、六月から十月まで開湯してゐます、客舎は四百人を容るゝに足り、登山に必要な食料を調へ、案内者を雇うことが出来、海抜四千尺の地にあつて酷暑の頃でも暑さを覚えませんが、東方高く、龍王、鬼、大鷲の連嶺を間近く望むことが出来、附近には鱒池、多枝原池、刈込池等の池が夫々異つた趣きを表してゐます。

温泉からは松尾坂の轡を越えて舊道と追分茶屋附近で合して日歸りに立山の頂上を極めて來ることが出来、近來冬期立山登山や針ノ木越えの絶好の根據地として重視されるやうになりました。

登路を藤橋から舊道をとり、歸路を温泉にさるのは面白い行程であります。

立山室堂は雄山の直下室堂平にあつて、標高實に八千尺の地点にあります、前に四間、奥行十間、九尺毎に尺角の柱を立て屋根は一吋厚の板が葺いてあります、日本アルプス中最も規模の大なるもので二百人も宿泊することが出来、前田百萬石の建造に係り、現在のものは享保年間に出来たものであります販賣部では饅頭、米、味噌、固パン、草鞋、手拭、繪葉書等を求めることが出来、炊事は一切中語にさせます。

室堂に隣つて大正十年新設された、立山氣象觀測所がありません、山麓まで電話が通じ、登山期中の天候、登山者の狀況等を報じてゐます。

室堂から北方数丁に地獄谷があります、ミドリガ池、ミクリガ池の小火口湖を経て急坂を下る一大窪地があつて無数の硫黄孔からは硫烟濛々として硫黄臭を衝き、その噴煙の狀熱湯の色によりて夫々命名せられ鍛冶屋地獄、紺屋地獄、團子屋、八溝等所謂八百三十六地獄の惨憺は又他に見ることが出来ません。

室堂を圍つて淨土山、雄山、大汝山、別山、大日岳、劔岳の峻嶺、巉峰が競ひ峙つてのを見ます、室堂から雄山の絶頂までは一里八丁と呼ばれてゐます、毎早朝半鐘を合圖に堂前に集り、神官の先頭で出發します、雪溪をへつて觀梅坂を登り切つて一ノ越に出ます。雲海の果から昇る御來光の壯觀は到底これに人に傳へることは出来ませんが、一ノ越は淨土川と御山澤との分水嶺で、アルプス縦走者の幕營地であります、二ノ越、三ノ越四ノ越、五ノ越の急崖を攀ると三角標石があり、九品の石室を過ぎて登ると雄山の絶頂に達します。

絶頂には間口二間、奥行九尺の堂宇があります、天手力雄命、伊弉諾尊を祀つてある雄山神社であります、社前は狭いが小さい丸石が美しく敷き詰めてあるのを見ます、今では實測の結果立山は白山よりも高いことは明にされましたがその昔白山と互にその高さを競つたとき立山は草鞋の厚さだけ低いといふので參拜者は必ず山麓から小石を携へて來てこの山嶺に積んだのであります、神官は社の人口で草鞋を脱ぐことを命じ草履で社前に整列せしめ、徐ろに扉を開いて祝詞を上げます、それが終ると一同に御神酒を戴かせます。

若し暗れた日ならばその眺めは實に言語に絶するものがあります。神秘に鎖す黒部の大溪谷を隔て、白馬後立山の連嶺、南方、日本アルプスのマツタールン槍ヶ岳を始め穂高、常念、大天井、燕より近く越中アルプスの一雄、薬師岳、アルプス中のパラダイス五色ヶ原、さては遠く南アルプスの赤石、白皚、富士の一萬二千尺、更に八ヶ岳、妙義、淺間、日光の利根奥山の二帯を盡く双眸の中に蔽めることが出来、視野を變へれば遙に漂蕪たる日本海と富山平原を敢下し、目前に劔の絶嶮が天空に聳立する、パノラマ的大觀は北アルプス中稜に見るこゝろであつて立山は實に絶好の展望臺であります。

室堂からの歸路は普通、舊道を下るか、立山温泉を廻るかであります。が何れにしても同じ道を上下するのは登山の行程としては面白くありません。成可く異なつた道を選んだ方が興味が深いと思ひます。温泉へ下るには松尾坂を下るのであります。が少し徒脚の人なら五色ヶ原を廻つた方が面白い、これには案内者を伴はなければなりません。

早朝室堂を立つて一ノ越から雄山に参拜し、再び一ノ越に引き返して、淨土山、龍王岳、鬼岳を越えてザラ峠に出で、五色ヶ原に往復して、ザラ峠から湯川谷を下つて立山温泉に着くのであります。室堂から一日行程であります。龍王岳の下りに悪場がありますから注意を要します。ザラ峠から五色ヶ原へは細い尾根を行くこと約十町で達せられます。

天正十二年嚴冬、富山の城主佐々成政が手兵五十を率ひて、このザラ峠を越え、針木峠の險を踏破して信州大町に出たことは

ナポレオンのアルプス越えに比すべき壯圖として知られてゐます。ザラ峠の名も佐々越えの轉訛したものとはいはれてゐます。

五色ヶ原は日本アルプスのパラダイスと稱せられ、西方には和らかい山容の鷲岳、奥大苾岳が聳え、次第に低下して黒部の溪谷に望む一大高原で、盛夏の候は高山植物が爛漫として咲き亂れ、偃松の群落と大雪田とが去來する雲霧の間に隠顯し、薬師、赤牛から信飛國境の群嶺が之を圍繞して、夏の陽光の下に輝く様は宛然天上の樂園さしか思はれませんが、五色ヶ原は立山温泉から目歸りに來ることが出来るので來遊者が常に多く、又天幕生活の好適地とされてゐます。

大正十二年二階建の立派な小屋が原の入口近くに建設されて非常に便利になりました。

五色ヶ原から薬師岳へ行くには五色ヶ原を横切つて奥大苾から、越中澤乗越、越中澤岳の尾根を傳つて數河乗越を経て一隆起を越すと、薬師ノ池があつて幕營することが出来ます。其處から約半里で薬師の頂上へ達します。頂上には間口八尺、奥行三尺の薬師堂があります。山麓の有峰村で建てたものです。人里遠く離れたこの村では疾病に冒されても醫師に就くといふことは出来なかつたのでこの薬師堂を作り、病人がある家では日々參詣してその平癒を祈つたのであります。薬師の東面に懸る殘雪は有名な大カールであります。

下りは薬師の大尾根を南下して太郎山を越し、太郎兵衛平から眞川を渡つて大山村有峰に出ます。有峰から富山に出るには(一)四千三百尺の大多利峠を越して飛彈の大多利村に出で、跡

津川を下つて高原川の落合、土村から越中街道を進み、茂住、猪ノ谷を経て、神通川に沿ふて富山鐵道の終點笹津に出るか、(二)シケノベ平、東笠山、高杉山を越えて水須に出て千垣から汽車で富山へ出るか、(三)折山峠を越して真川を下り立山温泉を迂回して富山に向ふか(四)有峰から前川を下り、新道を直接千垣へ出るかであります、(一)の飛騨へ出た方が道は少し遠いが最も容易な道であります。

室堂から日歸りで行ける山歩き、

大袈裟な準備なくして立山全山を究めんには室堂を根據地とするのが最も便利です。

(一)三山巡り。所謂立山三山巡りは面白い行程であります、昔から立山登拜といへば雄山に限られてゐたもので、三山巡りをする人は餘程の剛の者さされてゐましたが登山が隆盛になつた今日では單に信仰の意味でなくとも盛んに行かれるやうになりました。三山巡りとは淨土、雄山、別山の尾根縦走を云ふのであります、朝室堂を發出して、直ちに南方の尾根に取附いて淨土山に登ると山は平垣で小さな祠があり、傍らに日露戦役に立山隊として奮戦した第九師團の戦死軍人の忠魂碑が建つてゐます。一ノ越の鞍部を経て雄山、大汝、富士、折立、眞砂岳の山稜を傳つて別山南谷を下つて淨土川を渡つて室堂に歸着します、別山の頂上には帝釋天を祀つた小祠があります。

(二)劔岳行 室堂から劔岳へ登攀するには早朝室堂を發足してミクリガ池附近から下つて淨土川を渉り、更に奥大日岳から別山に通ずる尾根に取附いて別山に出で、別山北谷から劔澤の

雪溪を下ります、別山北谷には平垣な處があり、水もありませんから幕營に適します、劔澤の雪溪を行くと左手に劔の頂上近くに遶する急峻な一雪溪を見ます、これが平藏谷の雪溪でこれに登つて頂上に遶し、歸路は長次郎谷を下り別山を越して室堂に歸着します、以前は劔の頂上には天然の五重の塔があるといはれ、惡絶險絶、到底登攀し難いものとされてゐましたが先年陸軍陸地測量部の人々に依つて初めて頂上を極められました、その際頂上に結びた太刀と錫杖の頭が發見されて、前人未踏と考へられてゐたこの山も昔行者に依つて既に踏破されてゐたことが知られました。

平藏谷の雪溪は長次郎谷のよりも急峻で、頂上近くの取附に悪いところがあります、最も安全にして且つ容易な道を選ばなければ長次郎谷を上下すべきであります。併し雪溪の上部、熊ノ岩附近が八月中旬以後になると雪溪の一部が陥没することがあるから少し遠廻りではあるが右の雪溪か登ります。

劔岳に登るには通常以上の二雪溪を上下するのでありますが多少山岳旅行に慣れた人ならば別山から鶴ヶ御前岳(二七七六米突)を経て山稜傳ひに頂上に遶すものも面白からうと思ひます、別山から劔岳頂上へ出で三ノ窓、小窓、大窓に至る尾根縦走は北アルプス中最も困難なものさされてゐます。

金カンザギ、ピツケル又は岩口の附いた杖が要ります、尾根傳ひに行くにはロープを必要とします。何れの登路を選ぶにしても確實な案内者を伴はればなりません。

(三)奥大日岳行 室堂を立つて地獄谷を横切り淨土川を渡つ

て別山から大目へ續く尾根に取附き、低松を分けて細い尾根傳ひに登つて行くとき大目の頂上に出ます、大目岳は室堂方面から見ると平凡な山のやうに見えますが早月谷に面した裏側は長い雪溪が幾つも懸つて物凄い山貌を呈します。

立山は富山から入るのが所謂表口で最も便利であり、且つ容易であります、他に二三の登路がありますが、凡て是等の道は山岳旅行としての準備を必要とします。

### 一、黒部口

北陸線三日市驛で下車したなら直ちに黒部電軌に乗換へ、約三十分で終點下立くだたてで下車します、愛本から黒部川の左岸の豪宕な流れを瞰下しつゝ、愛本温泉を過ぎ宇奈月谷から、初め名匠左甚五郎が作つたと云はれる日本三奇橋の一の黒部吊橋を渡り右岸に沿ふて行きます、宗右衛門茶屋、佛石茶屋を過ぎて五味平に出ると黒蘆川が北から來て黒部本流に注ぐのを見ます、上流一里許りに黒蘆温泉があります、黒蘆の吊橋を渡り、笹平、出し平、猫又川を越えて東鐘釣山の西麓を繞つて鐘釣橋に依つて再び左岸に移ります、對岸には新鐘釣温泉があります、西鐘釣山の東麓を過ぎて行くとき鐘釣温泉に着きます、こゝまでは立派な林道であります、これより上流は道は狭くなります、愛本から約六里。

二里許りで小黒部川の吊橋を渡ると、激流岩を嘯む猿飛の絶景を脚下に瞰みます、黒部本流と別れて祖母谷に入り、祖母谷温泉跡から南越の長坂を登り、餓鬼の田圃を過ぎ、餓鬼山の南麓

## 立 山

をへつゝ、大黒嶺小屋の尙ほ上の八方小屋に行きて一泊し、翌日八方の新道から信州神城村に下り自動車で大町に出で、或は八方小屋から唐松岳、不歸岳、天狗岳、鐘ヶ岳、杓子岳を経て白馬岳に一泊し、翌日大雪溪を下つて北股から四ツ屋に出ることも出来ず、鐘ヶ岳南方から鐘ヶ岳温泉を経て南股から四ツ屋に出ることも出来ず、黒部川は溪谷の美を以て其名夙に現れて居ますが猿飛から上流は黒部特有の所謂廊下が續くために全川の探勝は非常に困難なものなされてゐます、近く猿飛から下廊下を経て平たいらまで山道が開かれる筈であります。

猿飛から立山へ行くには黒部と小黒部との合流點、櫛平から小黒部の右岸を喬木林中を行くと南平に出ます、本流與左衛門谷を屢々徒渉して廻ると雪溪に差掛ります、猿飛から約三里、劔大窓の雪溪が西から合します、雪溪を登り切つて灌木の間を分けて一尾根に出ると小黒部嶺山衝跡の小屋があります。輝水鉛鑛を採掘してゐたこの鑛山は數年前に廢坑になつて小屋は風雪に曝らされて既に傾いてゐますがまだ宿ることは出来ず南側の一盆地が池ノ平で物凄い池が靜かに眠つてゐます、こゝから劔の三ノ窓、小窓邊りの巖岩聳立して劔の特徴を遺憾なく發揮してゐる様を間近く見ることが出来ず、東方の仙人山(三〇二)米突、五萬分一地圖に池平山とあるものゝを越すと仙人潭の上流に仙人湯があります、昔宿舎があつて早月川沿岸の人々が天窓を越して湯治に來たこともあるといひますが今は訪れるものもない無人境であります。

翌日は小窓の雪溪を下り、三窓の雪溪に合し、梯子潭、南又

澤(眞砂澤)を経て劍澤の本流を遡るに愈々大雪溪が初まります。右に長次郎谷、平藏谷を見て別山鞍部を越して淨土川を渡り室堂に達します。

## 二、早月口

北陸線滑川驛で立山鐵道に乗換へ約三十分で上市驛<sup>ウキヤ</sup>で下車します。上市町を出て上市川の左岸を遡るに約二里、千石村を過ぎて山を越し約一里で早月川の左岸伊折村に着きます。こゝで案内者を雇ひ、早月川の左岸に沿ふて行くに約一里半、立山水電會社の發電所があります。約二十丁で早月川の本流、白萩川、立山川の合流點に達します。薄の生茂つた三角洲をなしてパンパ島さいひ、以前立山地獄谷から採取した硫黄が精製した小屋の跡があります。こゝからは劍岳の全容を望むことが出来ます。立山川を遡つて立山地獄谷に出て室堂に達する道は今は非常に荒廢して通過困難であります。白萩川を遡つて劍の大窓を越して池ノ平に行く道も小黑部饅頭山があつた頃は物資を總て伊折から運搬したので可成り良い道があつたのですが今は山道や橋は皆腐朽、流失して甚だ困難な道となりました。

## 三、大町口

以上述べた登山口は皆富山縣に屬するものでありますが、近年針ノ木の大雪溪が有名になると共に信州大町からも盛んに登られるやうになりました。

信濃鐵道の終點大町を出發して、鹿島川を渡り大出村を過ぎるに道は漸く登りとなり、絶えず籠川の左岸を行き、大出村から二里、一支流白澤を越すに小林區署の島山の小屋があり、前面に鳴澤岳、赤澤岳の連嶺が見えます。山毛榉林の中を進み、扇澤、鳴澤、赤澤を過ぎるに大澤渡に出ます。石小屋があります。大町から一日行程であります。小屋から二十分許りで針ノ木の大雪溪にかゝりますが、金カンヅキを着けて登ること約一時間で峠の頂上へ達します。峠は蓮華岳、針ノ木岳の鞍部で時間許せばこれ等の山に登ります。蓮華には今年小屋が作られる筈です。峠から針ノ木谷に向つて岳樺、白樺、山樺木の間を下り、紫丁場から幾度か徒渉してカラ澤、牛小屋澤を経て大南澤の合流點に出ます。美しい河原で幕營に適します。行くに半里許りで黒部川に達します。籠ノ渡しに依るか少しく上流を徒渉して對岸に渡ります。この附近は黒部川中でも最も流れの緩く河巾の廣いところであります。左岸の平には小屋がありますから一泊します。これから立山に登るには温谷峠(刈安峠)を越えてザラ峠に出で鬼岳、龍王岳、淨土山を縦走して一ノ越に出るか、温谷、御山澤から直接一ノ越へ出て雄山に登ります。

佐々成政の針の木越えで知られる本道路は曾ては越中と信州との唯一の交通路で道も可成り開けてゐて、牛によつて鹽を信州に運搬したこともありましたが針ノ木邊りで道が險難な爲めに屢々斃れたので其後中絶してしまひました。當時黒部の平には二階建の立派な宿場があつたさいひます。



### 三、登山準備

登山に際してはその準備に細心の注意を拂はねばなりません。登山中の不祥事は多くは準備の不足に原因することを思ひ、特に怖るべき寒氣と飢餓に對しては充分の準備を要します。

(一)服装 和服より洋服がよい。防水布製の登山服なれば結構ですが二三日位の小屋泊りの登山ならば有合せの服でよろしい、ズボンに短いよりも長い方が宿舎に着いたときなど都合がよい、短いパンツを穿いて膝を出してゐる人があるが、山でいくら暑くても皮膚を直接外氣に觸れしめるのは良くありません、關節炎等の原因となります。シャツは必ず着換へを持参し宿舎に着いたとき等汗で濡れたものを身に着けないやうにします。帽子は防水布製のもの、麥稈帽、楡笠等がよい、草鞋のときは巻脚絆より普通の紺脚絆の方が具合がよい、足袋は刺した丈夫なものをを選び、餘分に一足携へます、草鞋は麻や、布製のよりも矢張藁製の方が徒歩の場合滑るのを防ぎ、歩行に際しては疲勞の度が少い、靴ならば底の厚い丈夫なもの、登山鉾を打つたものなら尚よい、雨具としては防水外套なら最もよいが、蓑、油紙でも間に合ふ、蓑の裏に油紙を縫着けたものなら雨に對して更に有効であります、小屋に泊る登山でも防寒具としては、スエター、毛シャツの類を必ず携ふべきであります。

(二)食料 小屋泊りの登山ならば菓子類位でよいが天幕旅行の場合は米、味噌等を携帯しなければなりません、副食物については特にその選擇に注意し徒らに贅澤なものを選ぶよりも梅

干、干鰯、煮干、漬物等が如何に山中に於て喜ばれるかは山へ行つたものの等しく經驗するところであり、山では副食物としては鹽氣の勝つたものが適します、飲料としては、コ、ア、茶等がよく、砂糖は是非必要であります。酒類は氣附としてウイスキー位を少し携へる外持参しない方がよろしい、非常用として鹽節は必ず用意します。

(三)携帶品 鉛筆、小刀、手帳、時計、磁石、用紙、紐、齒磨具、手拭、水香、箸、マツチ、提燈、蠟燭等遺漏なきを期せねばなりません、藥品も一通りは是非調ふべきであります。アスピリン、胃腸藥、カスカラ糖衣錠、絆創膏、硼酸軟膏、繻帶、脱脂綿、油紙位あつたら間に合ひます、參考地圖としては陸地測量部の五萬分一を揃へるのがよろしい。但し山岳地方は至つて簡單であるから旅行中見聞した地名、參考になる事柄を記入することを忘れてはなりません、立山附近へ旅行に必要な圖は五百石、立山、黒部、三日市、魚津、大町、白馬岳であります。携帶品を入れるにはリュクザツク(登山袋)が最も便利です。準備品は登山口で求めるよりも出立に際して豫め調へて行つた方がよろしい、登山口では幾分高價であり、それに満足なものが得られない場合が多いからであります。